

年間第13主日

マルコ 5・21 - 43

2021.6.27 高円寺教会

ジョン・ジュン神父（クラレチアン宣教会）

2週間前に、日本で20年間司祭として働いていた友人が国へ帰りました。彼は国に着いてからホテルで2週間の隔離が必要でした。インターネットと食事は提供されるがずっとホテルにいななければならない、まるで刑務所に拘留されているようで、がまんしている、と彼はわたしに不満と文句を言っていました。日本での隔離の方が楽かもしれません。自分の家にいることも出来ますね。

考えてみましょう。確かにコロナの感染者が傍にいるとき、誰でも近くにいることは怖いし心配だし、接触を避けます。逃げるかもしれません。

実は、昔も病人は大変な状況にありました。人々は病人に嫌な気持ちを持っていました。今日の福音の中で二つのケースがあります。一つは12年間出血の病に苦しむ女性の話、もう一つは12才のヤイロの娘の話です。

まず、出血病の女性の状況ですが、彼女は12年間とても大変でした。全てのお金を使い果たし精神的にもとても苦しんでいました。当時は病院もなく、国民健康保険もなく、彼女も家族も苦しんでいました。

ユダヤ人にとって出血の血は死のイメージがあり、恐怖でした。ですから、団体の祭りに参加することも禁止になります。

実は、彼女は自分でも卑屈になっていましたが、それでも「イエスの着物にさえ触れることが出来れば、自分は治ることが出来る」と思っていました。そして最後まであきらめませんでした。イエスは誰にも情けをかけ、病気の人々、罪人や不潔な人々全ての人を招きます。イエス様はいのちの力を持っています。

あの時、大勢の群衆の中でイエスは何故特に彼女に関心があったのでしょうか。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのだ。安心して行きなさい。もうこの病気に病むことはない」と言います。

確かに、大勢の群衆の中で彼女だけが神様の力を受け取りました。

次は12才の女の子について見てみましょう。ヤイロの娘は病気で亡くなります。イエスは言います。「恐れることはない。ただ信じなさい」。イエス様はその子を死から呼び覚ましました。イエス様に対して信仰を持っていれば死にも打ち勝つことが出来ます。

死を克服したことは、わたしたちに新しいいのちをあたえてくれました。12才と12年間、全く違う人生の二人が、イエスに救われる。この二つの話は当時のユダヤの信仰、病を表しています。当時の群衆の態度は、今日のキリスト教徒の態度かもしれません。

わたしたちは、日々の生活の中で祈るとき、ミサに参加するとき、ご聖体を通してイエス様に触れることとなります。

そこで新しい力といのちを受け入れることが出来るように祈りましょう。自分の信仰を強く持ってイエス様に触れることが出来るように祈りましょう。